

倉敷市埋蔵文化財報告 第2集

矢部41号墳

1990年3月

倉敷市教育委員会

序

倉敷市の北端に位置する庄地区は、古代吉備の中枢として古くから栄えてきた地域で、倉敷市では最も遺跡が密集するところとして知られています。

このたび、この庄地区の丘陵上で土取り工事中に新たに古墳が発見され、矢部41号墳と名付けられました。古墳はすでに墳丘の大部分を失っており、現状のままでは石室の崩落の危険が高いことなどから、やむをえず発掘調査を実施することになりました。

緊急の発掘調査であったため、調査体制や経費などの点で多くの制約がありましたが、調査の結果、古墳は横穴式石室を内部主体とする径8m程度の円墳で、回りには周溝を廻らしていることが明らかになりました。

この報告書はこれらの調査の成果をまとめたものであり、今後の文化財保護保存に活用されるとともに、地域の歴史を研究する資料として少しでも役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたり御協力いただいた関係各位に対し厚くお礼申し上げる次第であります。

平成2年3月

倉敷市教育委員会

教育長 今田昌男

例　　言

1. この報告書は、土取り工事に伴い緊急発掘調査を実施した、倉敷市矢部2111番地に所在する矢部41号墳の概要報告書である。
2. 発掘調査は、倉敷市教育委員会文化課職員福本明・鍵谷守秀・小野雅明が担当し、昭和62年5月14日から同年6月10日まで実施した。
3. 報告書の作成は倉敷市教育委員会文化課が行い、その執筆にあたっては第3章第4節を小野が、他を鍵谷が担当し編集を行った。
4. 遺物の実測・浄書及び写真撮影は小野が行い、遺構実測図の浄書は鍵谷が行った。
5. 遺物の整理にあたっては、長森恒子氏・森下久美子氏の協力を得、原稿の浄書等には三澤邦子氏・多賀和美氏にお世話になった。
6. 挿図中に使用した高度値は海拔高であり、方位はすべて磁北である。
7. 第2図の地形図は、建設省国土地理院発行の25,000分の1の地図（倉敷、岡山北部）を合成し複製したものであり、その他の地形図は倉敷市発行のものを複製したものである。
8. 発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等は、すべて倉敷市教育委員会文化課分室に保管している。

目 次

序 文

例 言

第 1 章 遺跡の立地と環境	1
第 2 章 調査の経緯と経過	3
第 1 節 調査に至る経緯	3
第 2 節 調査の経過	4
第 3 章 発掘調査の概要	6
第 1 節 墳丘と周溝	6
第 2 節 横穴式石室	8
第 3 節 遺物の出土状況	12
第 4 節 出土遺物	13
第 4 章 まとめにかえて	19

図 目 次

第 1 図 遺跡の位置	1
第 2 図 周辺の遺跡	2
第 3 図 周辺古墳分布図(S = 1/5,000)	5
第 4 図 墳丘測量図(S = 1/100)	6
第 5 図 墳丘・周溝土層断面図(S = 1/40)	7
第 6 図 横穴式石室実測図(S = 1/40)	9・10
第 7 図 石室平面図(S = 1/40)	11
第 8 図 石室内遺物出土状況(S = 1/40)	12
第 9 図 周溝内遺物出土状況(S = 1/40)	13

第10図	出土遺物 1 (S=1/3)	15
第11図	出土遺物 2 (S=1/2)	16
第12図	出土遺物 3 (S=1/3)	17
第13図	出土遺物 4 (S=1/3)	18

図 版 目 次

図版 1	1.調査前の状況(東から)	2.墳丘土検出状況(南から)	21
図版 2	1.北側壁付近の築成状況(東から)	2.南側壁付近の築成状況(東から)	22
図版 3	1.奥壁付近の築成状況(南から)	2.墳丘・周溝土層断面(南から)	23
図版 4	1.周溝内埋土の堆積状況(東から)	2.周溝内遺物出土状況(東から)	24
図版 5	1.須恵器壺5出土状況(南から)	2.須恵器蓋2出土状況(南から)	25
図版 6	1.土師器甕12出土状況(北から)	2.石室床面奥壁付近の状況(東から)	26
図版 7	1.石室掘り上がり後の状況(東から)	2.石室掘り上がり後の状況(南から)	27
図版 8	1.石室掘り上がり後の状況(北から)	2.石室掘り上がり後の状況(西から)	28
図版 9	1.調査終了後の石室(東から)	2.調査終了後の古墳(北東から)	29
図版10	出土遺物(1)		30
図版11	出土遺物(2)		31

第1章 遺跡の立地と環境

矢部41号墳は、倉敷市矢部2111番地に所在する。

古墳は倉敷市の北端、標高227mの江田山から東へ延びる丘陵が方向を北に変えて低く張り出した先端に位置する。より細かく見るならば、さらに小さく派生した尾根と尾根が形成するゆるやかな谷の付け根部分に立地している。古墳の位置する庄地区は、やや視野を広げれば倉敷市街地と岡山市街地とのほぼ中間に位置し、南北2~3kmのところにはそれぞれ旧国道2号線と国道180号線が東西に通じている。こうした交通上の利点から、のどかな田園風景を残すこの一帯にも近年開発の波が押し寄せてきつつある。

ところで、周辺の山丘縁辺部には西尾貝塚・大内田貝塚・矢部貝塚など、縄文時代から弥生時代前期にかけての貝塚が点々と存在しており、現在肥沃な穀倉地帯が広がるこの地域もかつては瀬戸内の海水が深く入り込んでいたと考えられている。また、それらを構成する貝が、カキやハイガイを主とする海水産のものからヤマトシジミを中心とする淡水産のものへ移行していくことが知られており、当時高梁川の支流や足守川が運ぶ土砂の堆積作用により徐々に沖積化が進みつつあった状況が推定できる。

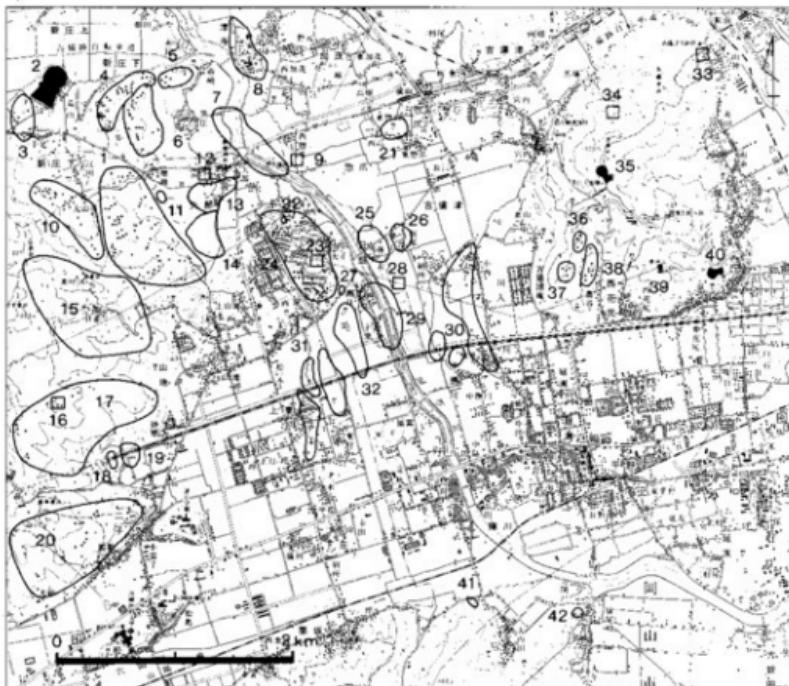
弥生時代に入ると、こうした沖積地の微高地上へ遺跡が進出するようになる。例えば、江田



第1図 遺跡の位置

山塊の東方から南東方向にかけて点々と存在する微高地上には、弥生時代前期の岩倉遺跡、中期を中心とする新邸遺跡、弥生~中近世にわたる上東遺跡および川入遺跡などが存在する。特に上東遺跡は、少なくとも4つの微高地上に存在する大規模集落跡で、この地域における弥生時代後期土器の標準遺跡ともなっている。

江田山山塊から平地を狭んぐ東側に位置する王墓山丘陵には、橋築遺跡を始め女男岩遺跡、辻山田遺跡など弥生時代後半から古墳時代初頭にかけての墳墓や数多くの古墳が存在しており、その名の由来ともなっている。



- | | | | |
|------------|--------------|-------------|---------------|
| 1. 矢部古墳群 | 2. 造山古墳 | 3. 造山古墳付古墳群 | 4. 向場古墳群 |
| 5. 甫崎古墳群 | 6. 黒住山古墳群 | 7. 矢部南向遺跡 | 8. 津寺遺跡 |
| 9. 惣爪廐寺 | 10. 矢部大谷山古墳群 | 11. 矢部貝塚 | 12. 矢部廐寺 |
| 13. 矢部寺田遺跡 | 14. 矢部伊能軒遺跡 | 15. 日差山古墳群 | 16. 二子堂屋敷 |
| 17. 二子古墳群 | 18. 二子御堂奥窓跡群 | 19. 御堂奥窓跡 | 20. 二子高鳥居山古墳群 |
| 21. 高田遺跡 | 22. 楠築遺跡 | 23. 日畠廐寺 | 24. 王墓山古墳群 |
| 25. 日畠橋遺跡 | 26. 新郵貝塚 | 27. 西尾貝塚 | 28. 柿梨堂 |
| 29. 才來遺跡 | 30. 川入遺跡 | 31. 上東遺跡 | 32. 岩倉遺跡 |
| 33. 神力寺跡 | 34. 高麗廐寺 | 35. 中山茶臼山古墳 | 36. 山神下古墳群 |
| 37. 向山古墳群 | 38. 奥谷古墳群 | 39. 矢藤治山古墳 | 40. 尾上車山古墳 |
| 41. 大内田貝塚 | 42. 関戸貝塚 | | |

第2図 周辺の遺跡

これらの古墳の多くは横穴式石室を伴う古墳時代後期のものであるが、中でも王墓山古墳は遺物の多さや種類の豊富さの点で他を圧倒しており、しかも貝殻石灰岩製の家形石棺を伴うなど、この地域で最も傑出した古墳の1つに数えられる。

本古墳が存在する山丘上には約100基あまりの古墳が確認されており、矢部古墳群・矢部大谷山古墳群を形成している。これらの古墳群は、尾根筋あるいは谷筋に沿って整然と並びいくつかの支群に分けることが可能で、いわゆる典型的な家族墓的様相を呈している。このうち、倉敷市で最古の前方後円墳である大塙古墳を除けば、そのほとんどが横穴式石室を伴う小円墳であり、確実に前半期にさかのぼると思われる古墳はこれまでほとんど確認されていなかった。ところが、最近岡山県教育委員会により実施された発掘調査で、前半期にさかのぼる古墳が相次いで発見され、しかもそのほとんどが一辺10m程度の小方墳であることが明らかとなってきた。また、これらの古墳も他の古墳と同様尾根上に整然と並んで築かれており、家族墓的性格の強い小古墳と言くことができる。一方、足守川を越え目を東へ移してみれば、吉備中山の山頂には全長約140mの中山茶臼山古墳、この南東尾根上には同じく全長約140mを測る尾上車山(ギリギリ山)古墳など、前期の大前方後円墳が存在する反面、後期の古墳群は少なくやや対称的な様相を示している。

この付近の古代寺院としては、まず王墓山丘陵の東裾に位置する日烟庵寺があげられる。倉敷市で最古に属するこの寺跡は白鳳時代の創建で、「吉備寺式」の軒丸瓦を出土することで有名である。この他、矢部庵寺をはじめ憩爪庵寺や柿梨堂など奈良時代の寺跡がわずかな範囲に集中している。また、続く平安時代には二子堂屋敷や日差山庵寺などの山岳寺院跡が知られている。

このように、王墓山丘陵を中心としたこの地域では各時代の遺跡が数多く確認されており、加えてその時代を代表する遺跡も多いことから、古代吉備の中で最も注目を集める地域の1つと言える。

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

矢部41号墳が存在する丘陵一帯には約100基の古墳群が確認されており、倉敷市で最も古墳が密集している地域である。これらの古墳は、尾根筋あるいは谷筋に整然と並びいくつかの支群を形成しており、いわゆる家族墓的性格が強いものとして理解できるが、ほとんどが未調査のため詳しいことはわかっていない。

昭和62年5月、この中の1基が土取り工事により破壊を受けているとの連絡が岡山県教育委員会から入った。至急現場に急行したところ、古墳は石室と墳丘の一部を除いてすでに土取り工事により破壊を受けていた状態であった。直ちに、土取り業者へ工事の一時中止の申し入れを行うとともに古墳を破壊するに至った経緯についての説明を求めた。

ところが、当該古墳は岡山大学考古学研究部が出している報告書（以下岡大報告）に勝負山A-3号墳として記載されているものの、本市の文化財分布図ではその存在が確認されていないものであった。したがって、これを工事中新発見の遺跡として取り扱うこととし、矢部41号墳として新たに遺跡台帳に加えることになった。一方、協議の結果土取りの範囲をこれ以上広げないことで業者の了承を得たものの、古墳についてはすでに石室の一部が露呈しており、崩落の危険もあることなどから現状での保存は困難であると判断し、緊急発掘調査を実施することになった。

第2節 調査の経過

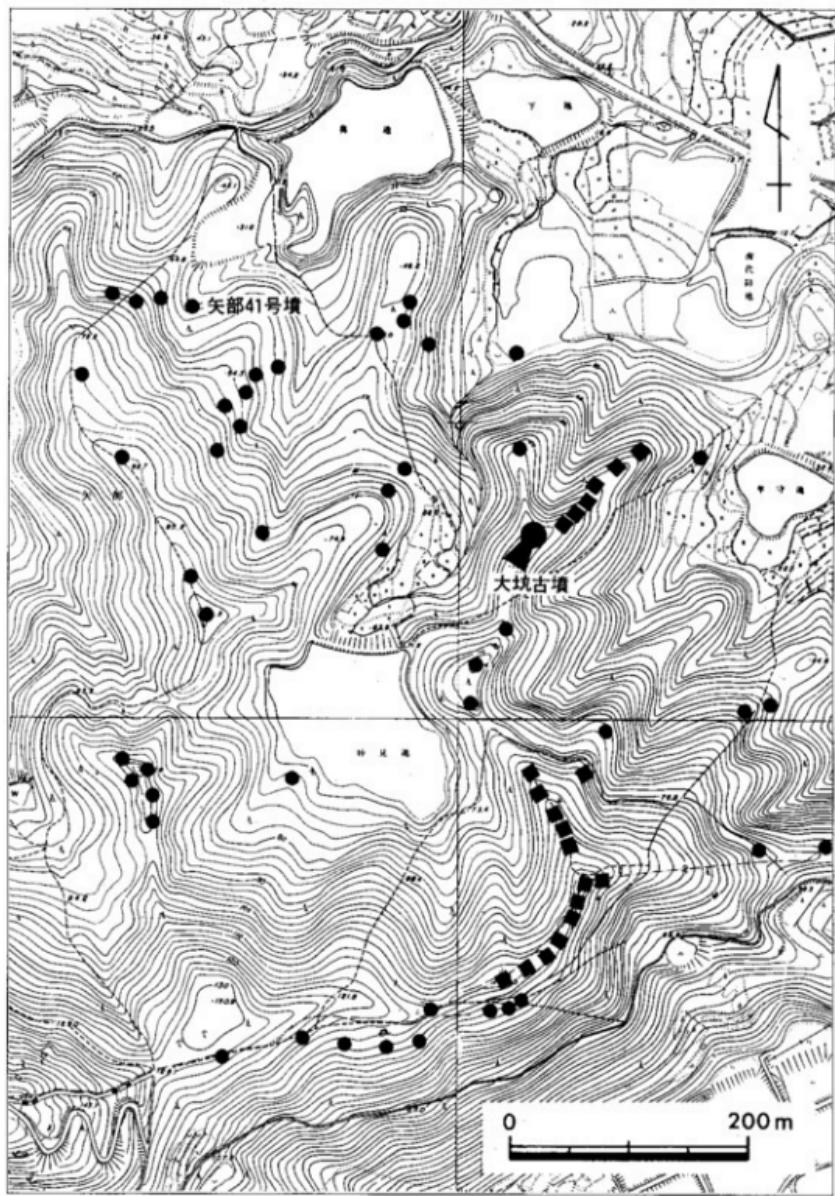
古墳は、調査開始時点において、奥壁側である西側の一部を除いてすでにその周囲が重機により削平を受けていた。石室もその前半部を失っていたが、岡大報告の石室実測図にも前半部が描かれていないことから、工事以前から同様の状況であったと思われる。また正面にあいたわずかなすき間からの観察により、内部には流土がかなり堆積しているものの、残存する石室の石組は比較的良好な状態を保っていることが確認された。

調査は、この石組の構築状況と西側でわずかに残っていると思われる周溝の検出、ならびに石室床面の確認を主な目的として5月14日から開始された。しかし、緊急の調査であったため調査員3名のみで発掘調査にあたらねばならず、墳丘土及び石室内埋土の除去等、特に人手を必要とする作業に手間どったものの、6月10日機材搬出をもって全ての調査を終了した。

日誌抄

昭和62年(1987年)

5月14日(木)	午後から機材を現場へ搬入。	内から須恵器壺片がまとまって出土。
15日(金)	石室内埋土除去作業。	5月26日(水) 周溝の写真撮影。午後から雨により調査 中止。
18日(月)	石室内埋土の掘り下げ続行。須恵器杯身、 杯蓋出土。	27日(火) 石室立面割り付。墳丘土除去作業。
19日(火)	石室内の掘り下げ続行。床面近くで人骨、 土師器壺出土。	28日(水) 石室実測。石室掘り方検出作業ならびに 掘り下げ。
20日(木)	周溝部分にレンチを設定し掘り下げ開 始。墳丘表土剥ぎ。	6月2日(木) 墳丘土セクション写真撮影及び実測。 5日(金) 古墳及び周辺の清掃、全体写真。
21日(金)	墳丘西側で幅1.5m~2.5mの周溝検出。	6日(土) 石室平面割り付、実測作業。
25日(火)	石室床面検出、清掃及び写真撮影。周溝	10日(火) 石室平面実測完了。機材搬出。

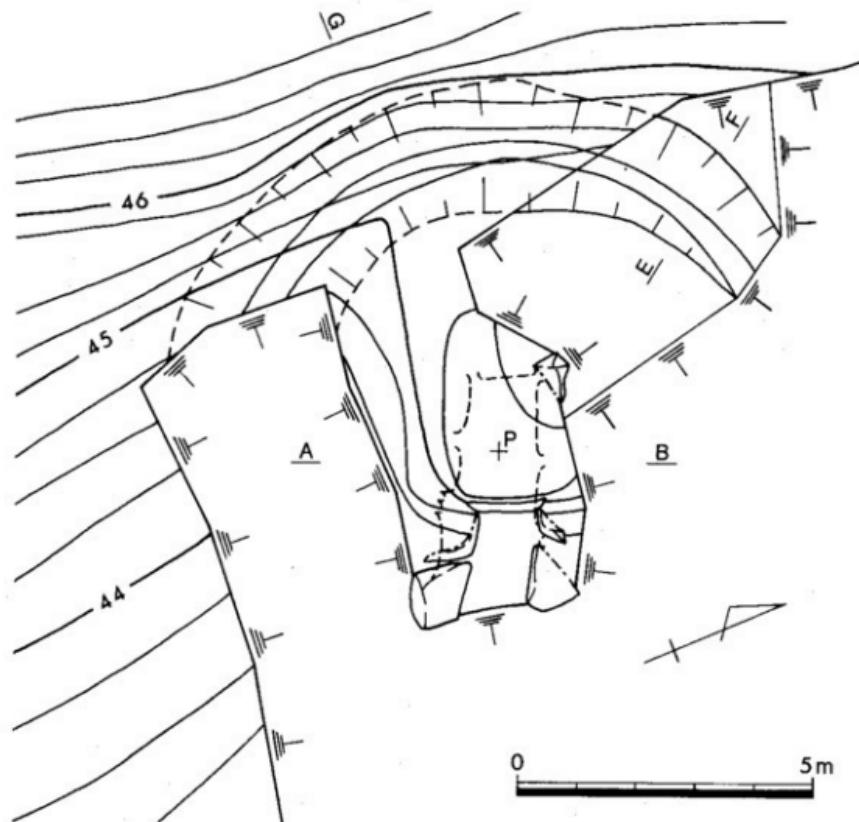


第3図 周辺古墳分布図

第3章 発掘調査の概要

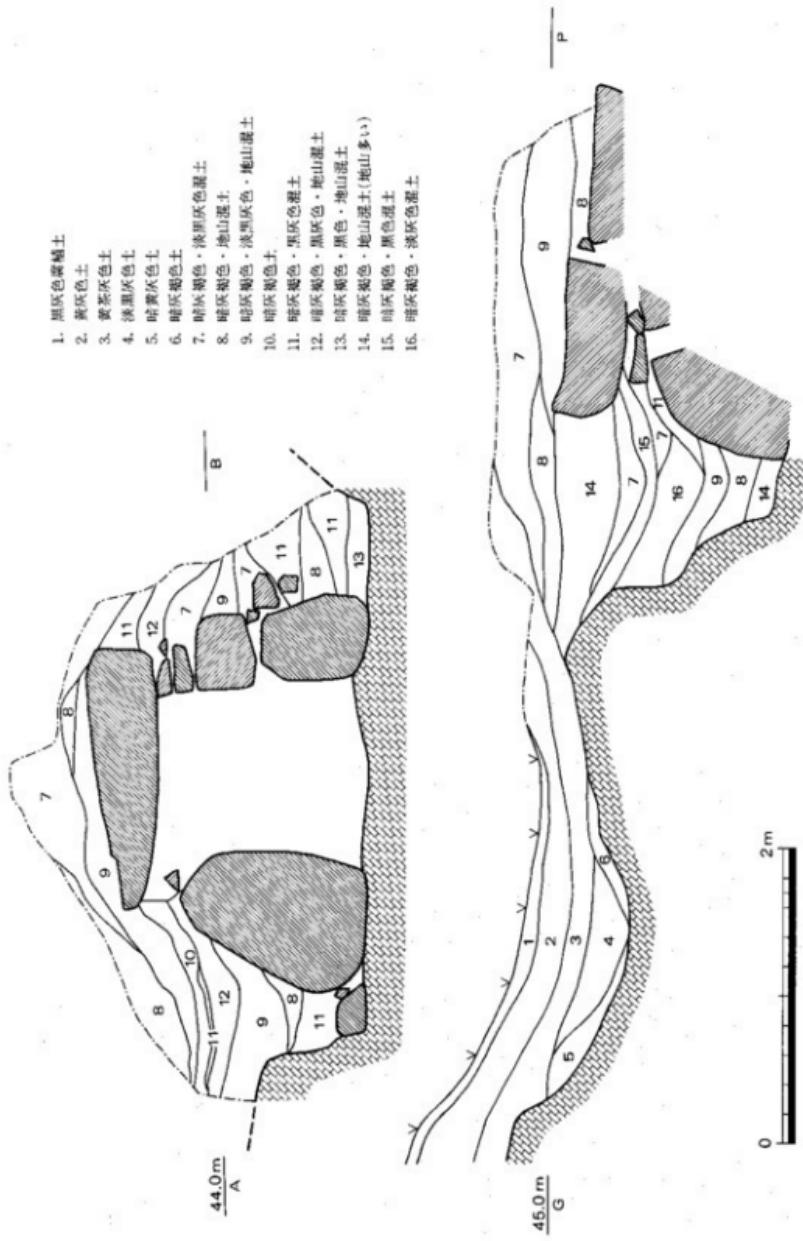
第1節 墳丘と周溝

古墳は、標高約44mの小さな谷の付け根部分に位置している。前述したように、古墳の周囲は土取り工事により削平を受けており、前面及び左右両側は石室近くまで地山が露出している状態であった。また、比較的残存状況の良い西側も重機により部分的に破壊を受けていた。そ



第4図 墳丘測量図($S=1/100$)

第5図 埋丘・周溝土層断面図 ($S=1/40$)



こで、石室主軸とは別に南へ約20°振ったラインを設定し、最も破壊の少なかった部分の土層観察を行ながら調査を進めた。

石室掘り方内には暗灰褐色土と淡黒灰色の混ざり土が、側壁側で20~40cm、奥壁側で10~20cmの厚みで版築状に重ねられており、非常に固く叩きしめられていた。掘り方肩部から天井石上面にかけては、埴丘盛土が厚いところで約50cm、薄いところで約10cmの厚みで数層認められた。天井石上には現状で60cm程度の盛土が確認されたが、残存する埴丘土の状況から推定してそれほど削平を受けているとは考えられず、頂部にはもともと1m弱程度の盛土があったと考えられる。土質は掘り方内の土に地山土を少し含んだもので、掘り方内ほど固く叩きしめてはなかった。

周溝は古墳背後の緩斜面で検出され、最大幅約2.5m・最大深さ約50cmを計る。地山を浅く皿状に掘りくぼめた周溝内には黒灰色ないしは暗灰色の堆積土が認められ、須恵器甕の破片が括で出土した。その両端は重機により削平されているが、石室の北側で幅約1.3m・深さ約20cmとその規模を減じていることから、本来は古墳の背後を半弧状に廻っていたものと思われる。

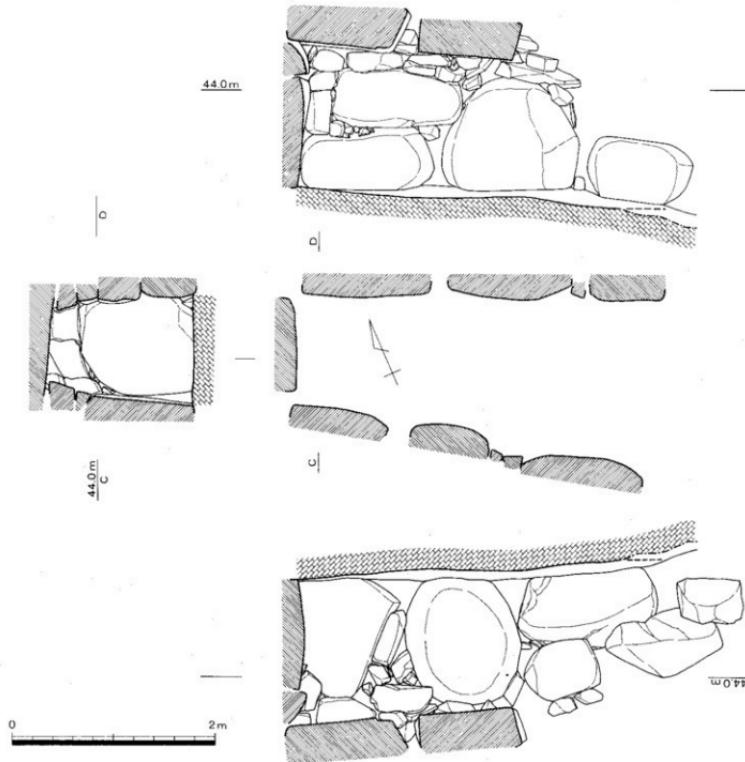
古墳の規模については、西側の一部で墳裾が確認されているのみで明らかではないが、周溝と石室の位置関係からおおむね直径8m前後の円墳であると思われる。高さについても推定の域をでないが、周溝最深部からは約1m、石室床面からは約2.5m程度の高さを有していたと考えられる。

第2節 横穴式石室

本古墳の内部構造はほぼ南東方向へ開口する横穴式石室で、その主軸方向はN65°Wを示す。前半部は失われているものの、奥壁側の天井石2枚目ぐらいまでは比較的良好な状態で残存していた。

石室残存部の長さは約4.3mを測り、現状では無袖式の形状を呈している。北側壁が石室主軸とほぼ平行なのに對し、南側壁は羨道部側に向かってかなり開いているため、石室幅は奥壁側で約1.1m、羨道部側で約1.6mを測る。この開きは、羨道部側の天井石が現状でやや南側にずれていることから考えて本来のなものではなく、土圧等により二次的に根石が移動したためと思われる。石室高は奥壁部分で1.4mを測るが石室前方へ向かうにつれ徐々に低くなり、その先端では約1.2mを測る。

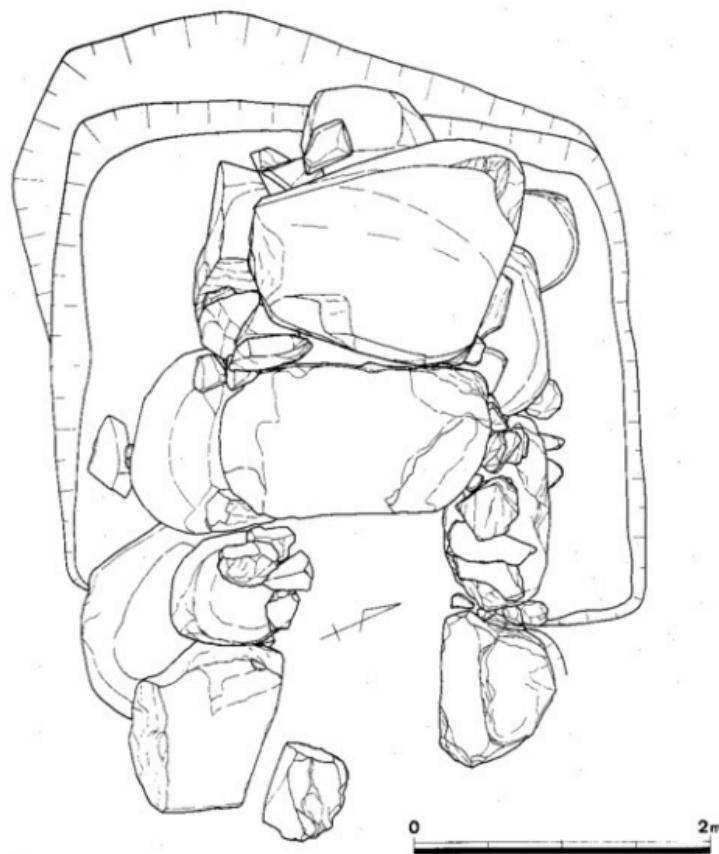
両側壁とも横長の石材を2段積みにしている部分もあれば、比較的丸みを帯びた大きめの石材を縦に据えることにより1段で済ましている部分もみられ、使用する石材に大きさ・形状等の統一性はほとんど認められない。したがって、石材間のすき間は必然的に大きくなるが、これにはやや小ぶりの石材ないしは割石を充填している。これらの石材は天井石と根石の間に



第6図 横穴式石室実測図($S=1/40$)

積まれており、全体として天井石の高さをある程度そろえる役目も果たしていたようである。石材の積み方に規則性は認められないが、壁面には若干の持ち送りを意図していたようで、奥壁付近で最上段の石材は根石より約10cm程度内側へせり出している。

奥壁は2段に積まれているが、下段に石室高の2/3程度にあたる高さ約1.1mの扁平な石材を用いている。その上段には高さ30cm程度の石を2枚積み、すき間を小ぶりの石で詰めている。



第7図 石室平面図($S=1/40$)

石室は、まず地山である花崗岩風化土に、長さ約3.5m・幅4.0mを測る隅丸方形の墓拡を掘りくぼめたのち、やや北側に片寄って構築されていた。墓拡は奥壁側で2段に掘られており、肩部からの深さは約1.5mを測る。傾斜地であるため羨道部側にいくにつれ浅くなるが、奥壁より約2.8mラインで90°屈曲しており、羨道部側においても明瞭な痕跡を残していた。石室掘り方の底面はそのまま石室床面となり、その中央部付近がわずかに浅く凹んでいるものの、排水溝と呼べるほどのものではなかった。

第3節 遺物の出土状況

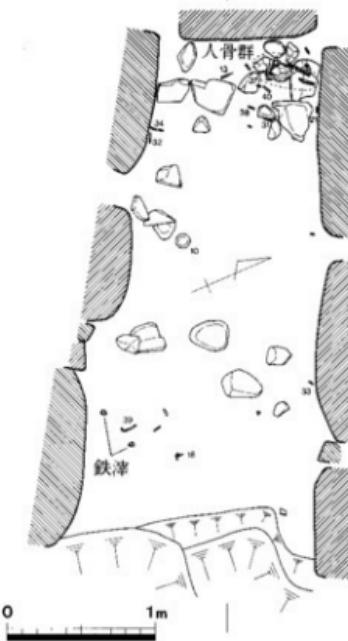
出土遺物としては、須恵器・土師器・鉄製品・人骨・鉄津等があり、石室内及び周溝中から出土している。また、直接古墳に伴わない遺物として、弥生式土器片が墳丘土ならびに周溝内埋土から出土している。

調査開始時において、石室内は天井石を欠く東半で墳丘盛土及び攪乱土が約80cm程度堆積しており、天井石との間はわずかに人の頭が通るぐらいの広さしかない状態であった。

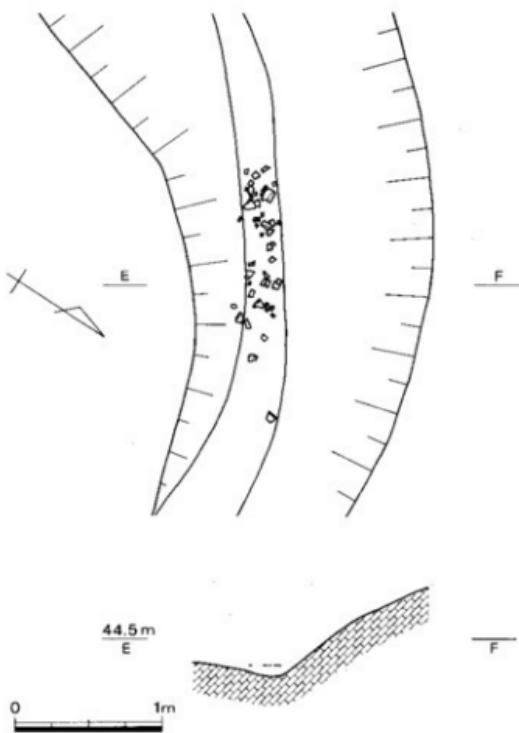
これらの堆積土は西側へいくにつれて薄くなり、奥壁付近では自然の埋土を除きほとんどこの堆積土はみられなかった。この堆積土中から須恵器3点、土師器2点が出土している。須恵器は甕・高杯及びこれとセット関係をなすと思われる蓋で、甕を除いてほぼ完形に復原できた。土師器は相似た形態を有する大小2個体の甕で、共にほぼ完形に復原された。

石室床面に伴うと思われる遺物の量は概して少なく、残存状況も悪かった。特に須恵器は小片が數片出土したのみで、そのうち復元できたのもわずかに1点だけであった。土師器についても、石室中央やや南側壁寄りで、完形の甕が裏向きの状態で出土したのを除けば、他に小片を1点検出したにとどまった。

石室床面上には、棺台に用いたと思われ



第8図 石室内遺物出土状況(S=1/40)



第9図 周溝内遺物出土状況(S=1/40)

のやや南側壁寄りで鉄釘と鉄滓が比較的まとまりをもって出土したものの、その数は少なく全体としては点存というべき状況であった。なお、鉄滓はこのほかにも石室内堆積土及び周溝中からも出土している。

周溝中からは、北端で須恵器壺が1点検出されている。壺は、あたかも故意に破碎されたごとくほとんどが小片の状態で、幅約40cm・長さ約1.8mにわたって散在しており、周溝底面からは10cm程度浮いていた。

第4節 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は整理用コンテナ2箱分と少量である。石室内から出土したものには、須恵器・土師器・鉄器（釘、釘など）・鉄滓・人骨があり、この中には完形で出土したものが含まれる。周溝内からは須恵器、鉄滓が出土し、須恵器の短頸壺1点がほぼ完形に復原

る小ぶりで扁平な花崗岩がかなり認められた。これらのうち、奥壁付近の一群についてはある程度のまとまりがみられるところから、比較的元位置を保っているものと考えられる。これらの棺台石に接して、石室北西隅で頭蓋骨と思われる部分を含む人骨群を検出したが、いずれも遺存状態が悪く取り上げは不可能であった。この人骨群の周辺で鉄釘が比較的まとまって出土したが、その位置・方向に特定の規則性を見い出すことはできなかった。これらの状況から、石室北西隅に木棺が存在したことを考えられるが、木棺の痕跡については全く検出されておらず、現状では推定の域にとどめておきたい。

奥壁付近以外では、石室東側

された。その他、古墳に伴わない遺物としては、埴丘盛土および周溝内埋土中から弥生時代中期の遺物がみられた。

1. 須恵器(第10図の1~9、図版10)

図示できるものは9点で、他に杯類などの細片が数点ある。5、9は周溝内から、他は石室内から出土している。

蓋杯(1)

小破片のため杯身の可能性も残されているが、一応蓋杯として図示した。口径は11~13cmと推定される。天井と口縁部の境は丸味をもち、口縁端部はやや外側に開き気味にして丸くおきめている。

有蓋高杯(2・3)

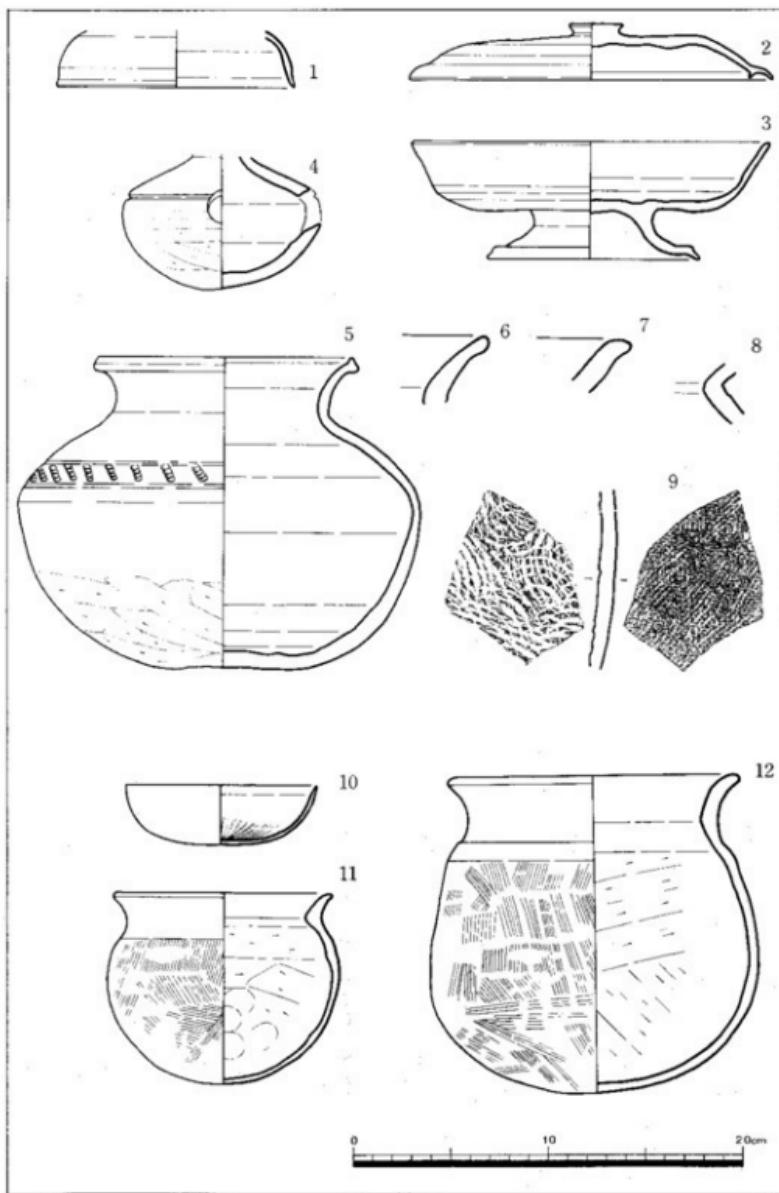
2、3ともほぼ完形に復原されたもので、出土状況や口径・胎土等からみてセットとして使用された可能性が強い。2は蓋で、口径18.8cm、器高2.9cmを測る。天井には径2.8cm、高さ6mmのボタン形のつまみが付く。口縁部内面にはかえりをもつが、その先端は口縁端を結ぶ線よりわずかに上方にある。破断面の観察ではこのかえりはハリツケによるものと思われる。かえりに対応する外面形状は四状になっている。調整は、天井部外面が回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。3は高杯で、口径18.5cm、器高6.0cmを測る。杯部は浅く、口縁がやや直線的に外傾している。脚部がつく付近では外形が少し突き上げられたような形状を呈する。脚部は低く、ラッパ状に強く外反する形状で、脚端部は斜め下方に小さく屈曲している。調整は、杯部の底部外面が回転ヘラケズリ、その他は回転ナデである。2、3とも色調は黄灰色で焼きが甘い。なお、3の高杯の上に2の蓋を置いてみると、蓋の焼き歪みのために少し隙間が開くが、蓋が杯部に少し覆い被さるようにして両者の口縁端が接する状態になる。

甕(4)

体部の約1/2が残存している。体部の高さは6.7cmで、ほぼこの1/2の高さのところで最大径10.2cmを測る。それより少し上で一条の沈線がめぐり、これを境に上部は低い截頭円錐に近い形状を呈し、ナデ調整が施され、下部は碗形でヘラケズリが施される。沈線を切るような位置で外面上方から内面下方へ向けて径約1.7cmの円孔が1つ穿孔されている。

短頸甕(5)

故意に破碎されたような状態で周溝内から出土したもので、ほぼ完形に復原された。口径13.1cm、器高16.1cmで、器高の1/2より少し高い位置で最大径20.7cmを測る。頸部は外反して口を開け、口縁端は断面三角形を呈する。肩部から体部にかけては、両者の境をいく分角張らせながらも丸く仕上げている。この境の直上には2本の浅い凹線がめぐらされ、凹線の間には板の木口部分を左に傾けて押捺した連続刺突が施されている。この刺突は1.6cmぐらいの間隔で



第10図 出土遺物 1 ($S=1/3$)

一周しており、37前後みられる。底部はゆるやかなカーブを描く丸底であるが、一部凹みがみられる。この部分のヘラケズリ調整痕が消えていることから未乾燥時の変形の可能性がある。調整は、体部外面の約1/2がヘラケズリの他はナデ調整である。

甕 (6~9)

すべて小片であり、口径は明らかでない。6、7は口縁端の形状がわかるもので、6は先太り状、7は先端を外側に反らせた形状を呈する。8は屈曲部のみの小片で、淡緑色の自然釉がかかる。9は胸部で、外面には平行叩きの後スリケシ、内面には同心円文がみられる。

2. 土器(第10図の10~12、図版10)

石室内から3個体出土し、いずれも完形に復原された。

碗 (10)

口径9.9cm、器高3.1cmを測る。胎土はほとんど砂粒を含まず、明赤茶色を呈する。内外面とも磨耗が著しく、内面中心から放射線状に暗文が施されているという以外は調整は不明である。

甕 (11・12)

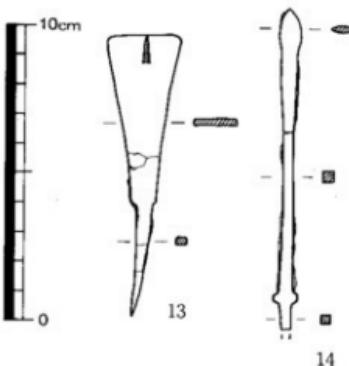
11は口径11.0cm、器高9.9cmを測る。胎土には砂粒が多く含まれ、赤褐色を呈す。口縁部は短く外反し、内面の形状は断面くの字状に内側に張り出したものとなっている。調整は、口縁部が内外面ともナデ仕上げ。体部は内面上位がヘラケズリ、下位が指頭による調整、外面はハケメ調整である。また、外面には黒斑が2箇所みられる。12は口径15.2cm、器高16.4cmを測る。胎土、色調が11と似ており、また外表に2箇所黒斑がみられる点から、両者は製作地が同じである可能性が強い。外反する口縁部をもつ丸底の器形であるが、体部最大径を測る位置を境に上部は張りがなく、下部は丸味を帯びたものとなっている。口縁部の調整は内外面ともナデ仕上げ。体部は内面にヘラケズリ調整、外面にハケメ調整が施される。

3. 鉄器(第11・12図、図版11)

鉄器には鉄鎌2点、鉄釘40点(小片も含む)、その他1点があり、すべて石室内から出土している。

鉄鎌 (13・14)

13は鑿頭式で、全長9.6cm、鎌身長5.7cm、茎部長3.9cmを測る。鎌身部は平造りで、平面形が逆三角形を呈し、最大幅2.5cmを測る。茎部は鎌身のわりに短く、断面形は長方形である。14は棘籠被ぎ柳葉式に相当し、茎部端を欠くが、残存

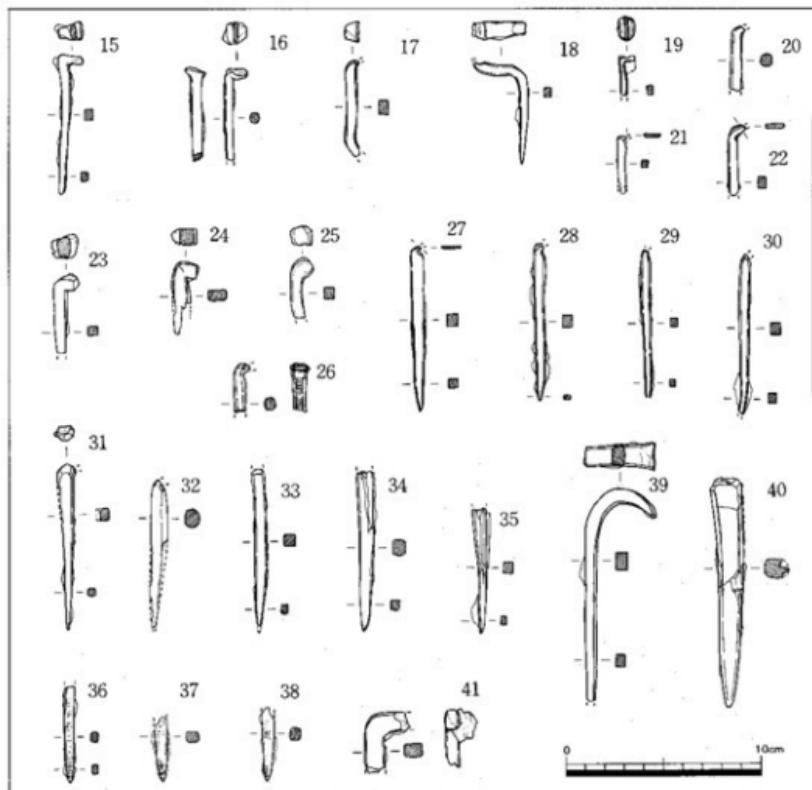


第11図 出土遺物2 (S=1/2)

長10.8cm、鐵身部は両丸造りで、最大幅7.5mmを測る。鎧被部、基部の断面形は一辺がそれぞれ4mm、3mmの正方形で、両者の境には直角方向に短く突き出た闊をもつ。

鉄釘・その他 (15~41)

完形品は少數であるが、形状のわかるものを含めて図示した。鉄釘は大別して15~38の小型品と、39・40の大型品に分けられる。15~38のうち全長のわかるものについて平均値を求めるところ、長さ7.85cmである。断面形が長方形のものと正方形のものがあるが、身幅は3.5mm×4.5mm~7.0mm×8.0mmの間にある。頭部の形態をみると、頭部が一方向に折り曲げられたもの(15~24、26~32)と、頭部が丸くなっているもの(25)とがある。前者のうち、折り曲げられた部分が薄く延ばされたものが大半であるが、23・24は折り曲げられただけの状況を呈している。



第12図 出土遺物3 (S=1/3)

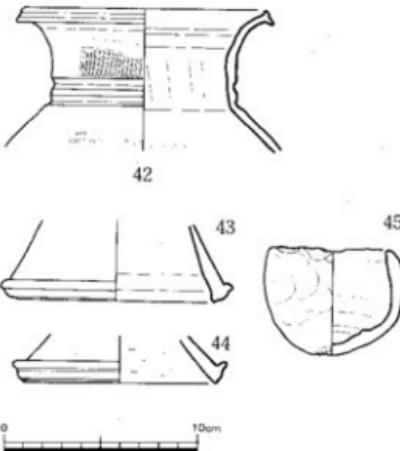
16・26・36~38は木質が部分的に残っている。39は先端を欠くが、残存長約13.4cmを測る。頭部端がバチ状に広がる形態で、その最大幅は1.5cmである。断面は長方形を示している。釘上部が杖のよう曲がっており、使用的跡をうかがわせる。40はほぼ完存しており、全長11.6cm、身幅10.0mm×13.0mmを測る。銹化が著しく、正確な断面形は不明であるが、丸味を帯びた長方形と思われる。41は直角に曲がる部分の細片で、鎌の可能性がある。幅は7.0mm×10.0mmで断面長方形を呈する。

4. 鉄滓(図版11)

石室内と周溝から総重量約400g出土した。比較的大きなものとして80gを計るものがあるが、他は20g以下の小塊である。

5. 弥生式土器(第13図)

42は周溝内埋土から出土した小型長頸壺で、口経は12.4cmに復原される。頸部に二本の凹線がめぐり、上下に少し拡張された口縁端の外面にも一本の浅い凹線がみられる。調整は、外面はヘラミガキの後ヨコナデ、内面は頸部がナデ、胴部は指頭による調整である。43・44は墳丘土中に含まれていた高杯の脚部である。小片のためスカシ等の有無は不明。45は手捏ね土器で、口経6.3cm、器高5.5cmを測る。色調は他の弥生式土器とは異なり、暗茶褐色を呈する。これらの土器は弥生時代中期後半の仁伍式に併行すると思われる。



第13図 出土遺物4 (S=1/3)

第4章　まとめにかえて

矢部41号墳は土取り工事中に新たに発見されたもので、すでに墳丘の大半を失っていた。そのため古墳の全体像を復原するには至らなかったが、調査により判明したいくつかの点について触れてみたい。

古墳の規模と構造

前述のとおり、古墳は墳丘の大半と石室の前半部を失っていたため、その規模については確實性に乏しいもののおおむね直径8m程度の小円墳であったと思われる。背後の斜面では、最大幅約2.5mを測る周溝が一部確認されており、もともとは古墳を半弧状に廻っていたものと推定される。石室残存部は、現状で長さ4.3m・幅約1.1mを測る。前半部を欠くため本来の長さについては明らかではないが、奥壁付近の石室規模や周溝の径等から考えて、現在値から大きく変わるものではないと思われる。

古墳の年代

今回の調査により出土した土器類は概して少ないものの、その形態的特徴から大きく2つの時期に分けることができる。杯蓋1は天井部と口縁部の境に稜を持たず端部を丸くおさめており、陶邑編年^{註13}のTK43併行期ないしはTK209併行期に含まれよう。実年代ではおおむね6世紀後半～7世紀初頭に比定できる。壺4は体部のみの破片であるがほぼ杯蓋と同じ年代が考えられ、周溝中から出土した壺5も肩部に文様帯を有しており、6世紀後半代のものと思われる。有蓋高杯2・3はあまり類例の知られていないものである。蓋2については陶邑窯での出土は知られておらず、あえて杯蓋との比較を行えば、かえりにやや古い特徴を残しているものの、全体的な形態からTK48併行期にほぼおさまるのではないだろうか。高杯3についても直接比較すべき資料は見当らないが、TK46段階のものに比べ一層低脚化が進み杯部も大型になるなどより新しい様相がみられ、蓋が示す時期を矛盾することはないとと思われる。したがって、実年代としては7世紀後半～末葉に比定できる。土師器については、甕型土器11・12を杯蓋の時期に、碗を有蓋高杯の時期にそれぞれ含まれるものとして考えてよいと思われる。

以上のことから、矢部41号墳は6世紀後半に築造され、7世紀後半から末葉に至るまでに最低1度の追葬が行われたものと考えられよう。

古墳の被葬者

石室内の出土遺物は鉄釘を除けば種類・量共に少なく、全体としては点在という状況であつ

たため埋葬主体に関する良好な資料はあまり得ることができなかった。しかしながら、石室の奥壁北寄りで鉄釘のまとまりが認められ、棺代と思われる割石や人骨なども出土していることから、おそらくこの位置に木棺が存在していたと思われる。

古墳の被葬者の性格を知るうえでいま一つ注目すべき遺物として鉄滓がある。鉄滓を伴う古墳は美作を中心として県北に多く見られるが、近年総社市作山古墳から岡山市造山古墳にかけてのいわゆる古代吉備の中核地と言われる地域で出土例が知られるようになってきた。特に、最近岡山県教委が実施した矢部古墳群の調査では、対象となつた4基の後期古墳全てから鉄滓が出土している。^{註15}これら古墳には、当古墳と同程度の規模を有する小円墳や石室全長約8.5mを測るやや大型の古墳が含まれており、矢部古墳群でみる限り古墳の規模と鉄滓伴出とは関係がないようである。鉄滓の出土意義については、被葬者の鉄生産への関わりとして一般的に認識されているが、古墳あるいは古墳群によって出土する場所や状況が大きく異なることが報告されており、今後より詳細な比較を通しての考察が必要となってくると思われる。^{註16}

註

1. 清野謙次『日本原人の研究』図書院 1925年
2. 織木義昌『岡山県都窪郡大内貝塚』『日本考古学年報2』 1954年
3. 平田英文『三備地方貝塚集成概説2』『吉備考古』86号 1953年
4. 平田英文『三備地方貝塚集成概説1』『吉備考古』81・82合併号 1951年
5. 「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会 1977年
6. 註5と同じ
7. 近藤義郎『編集遺跡』山陽カラーシリーズ 山陽新聞社 1980年
8. 間壁忠彦・間壁義子『女男岩遺跡』『玉墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年
9. 間壁忠彦・間壁義子『辻山田遺跡』『玉墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年
10. 岡山県古代吉備文化財センター浅倉秀昭氏の御教示による
11. 玉井伊三郎『吉備古瓦試踏』第2輯 1941年
12. 『倉敷市矢部遺跡分布調査報告書』岡山大学考古学研究部 1984年
13. 田近昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
14. 「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告35』岡山県教育委員会 1979年
「高坪古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告50』岡山県教育委員会 1982年
「緑山17号墳」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告1』総社市教育委員会 1984年
15. 『岡山県埋蔵文化財報告17』岡山県教育委員会 1987年
『岡山県埋蔵文化財報告18』岡山県教育委員会 1988年
16. 「篠瀬古墳群」『津市埋蔵文化財発掘調査報告第13集』津市教育委員会 1983年

図版 1



1. 調査前の状況（東から）



2. 墓丘土の状況（南から）

図版2



1. 北側壁付近の築成状況（東から）



2. 南側壁付近の築成状況（東から）



1. 奥壁付近の築成状況（南から）



2. 填丘・周溝土層断面（南から）

図版4



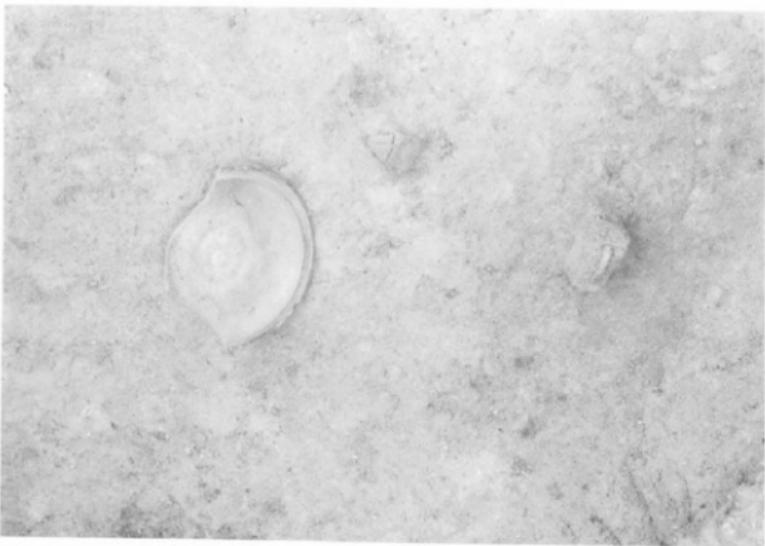
1. 周溝内埋土の堆積状況（東から）



2. 周溝内遺物出土状況（東から）



1. 須恵器壺 5 出土状況（南から）



2. 須恵器蓋 2 出土状況（南から）

図版6



1. 土師器甌12出土状況（北から）



2. 石室床面奥壁付近の状況（東から）



1. 石室掘り上がり後の状況（東から）



2. 石室掘り上がり後の状況（南から）

図版8



1. 石室堀り上がり後の状況（北から）



2. 石室掘り上がり後の状況（西から）



1. 調査終了後の石室（東から）

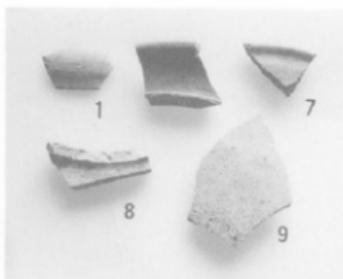


2. 調査終了後の古墳（北東から）

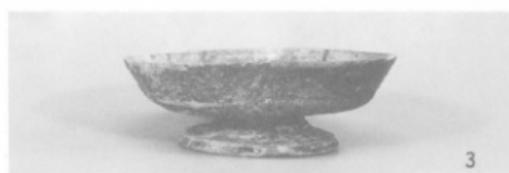
図版10



5



2



3



12



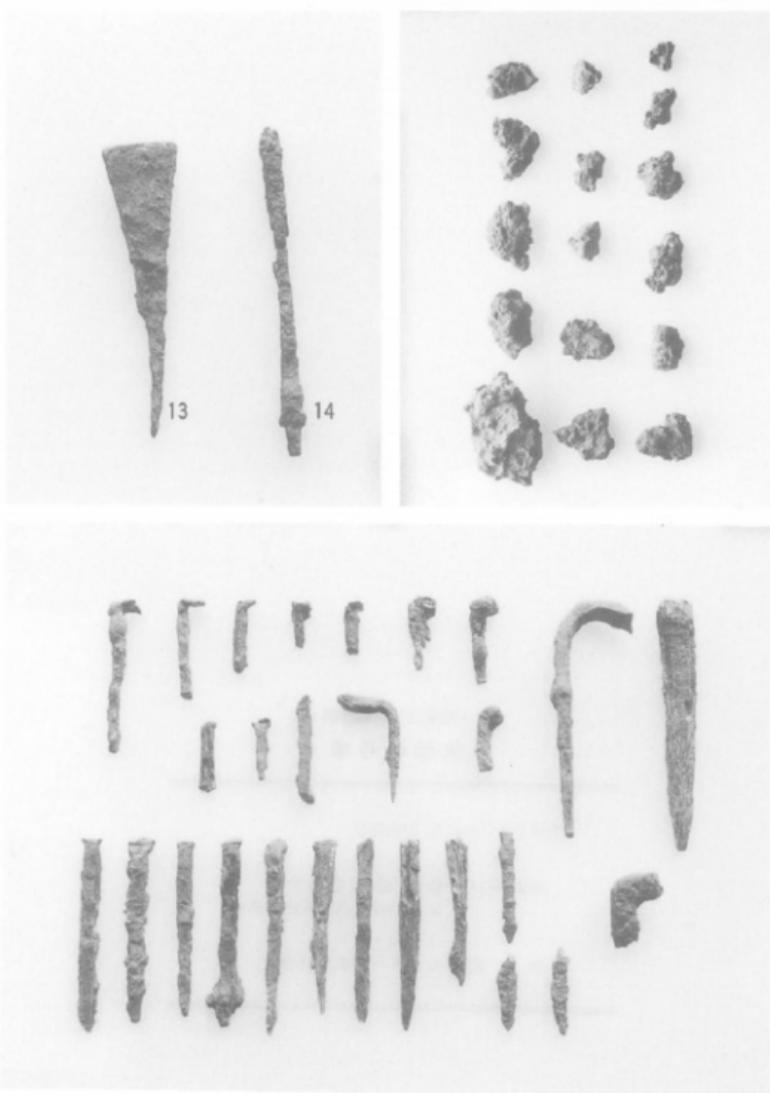
11



10

出土遺物 (1)

図版11



出土遺物 (2)

倉敷市埋蔵文化財報告第2集

矢部41号墳

平成2年3月31日 印刷発行

編集・発行 倉敷市教育委員会
岡山県倉敷市西中新田640番地

印 刷 サイトー印刷株式会社
